

平和があらまぢように Shalom

今年のゴールデンウィークは土日も加わり七日まで延長されているが、

通常は五日の「子どもの日」が掉尾を飾る。この日は三月の「ひな祭り」

に対し「端午の節句」である。室内に鍾馗様や武将、

金太郎が飾られるがやはり五月の空

に泳ぐ鯉のぼりは

時宜をえている。都会ではマンションの窓から小さい鯉が遠慮がちに顔を出しているが、少子化の時代ここに男児ありを証してこの子の成長を祈る。

一方、旅先で見る鯉のぼりは悠然と泳ぎ勇壮である。この鯉のぼり真鯉が上か、緋鯉が上かご存知か。答え「恋に上下の隔てなしでどちらでもよいのだ」ダジャレは別にして、最近大河を渡る横並びの鯉群を見かける。親や老鯉に交じって子どもたちが描く孫鯉が一人前に泳ぎ「みんなちがってみんないい」ほほえましく

い光景である。縦と横、十字架ではないか。
もう四十年前も前、「ちまたたべながら」ではなく折に触れて校宅の柱に彼の身長を刻んでいった。いつの間にか計る方と計られる方と逆転し彼から見下ろされその上息を吹きかけられた。同世代の中では高々と自負していたのがコケにされ、自虐を込めてわざと身をかがめ「お前は偉いよ」と言った。そのついでに部屋を見回したところ普段見慣れた風景が全く新鮮に映ったのには驚いた。ほんの少し視点を変えただけでこんなに違う経験をした。



そういえば「三十センチの高さから見た銀座の歴史」という記事を紹介されたのを思い出した。筆者は靴磨き歴何十年の女性で若者が出世していくエピソードも綴られていた。たまに行く銀座、お上りさんよろしくビルを見上げて歩くが、僅か三十センチの足元から見続けていたのはユニークである。

■ 今日は何の日 ■

第2日曜日の岩前 宏

みなさん、いつか礼拝堂の会衆席に仰向けになって天井を見上げてご覧になっては。この木組み何という工法なのか。設計者は誰か。電灯、地震には大丈夫か、切れたら誰が取り換えるのか。(高くて怖いですよ)さらに、ここに坐り折った先人に思いを馳せるとか。

イエスの視点はどこに。まずイエスとは誰か。「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり：死に至るまで、それも十字架に至るまで従順でした」(ツィリピ2…6)

その十字架上での第一声は「父よ、彼らをお赦しください」であった。十字架にと叫んだ彼らであるにもかかわらず、父なる神に赦しを願っている。なぜ赦しなのか。その理由が次に宣べられる。「自分では何をしているのかわからないのです」と。

十字架上で苦しむイエスの視線はイエス抹殺をもって目的成就とする者、それこそよく分からずにいる群衆に

あり天の父への執り成しであった。この上下の目線を童謡詩人金子みすずは「子供が 小雀 つかまえた。その子のかあさん 笑った。雀のかあさん それみえた。お屋根で鳴かずに それ見えた。」(雀のかあさん)

われらの立ち位置はどこに。イエスに教えられ、雀のかあさんの悲しみに寄り添いたい。

十字架の出来事は死の闇で終わらず光り輝く復活という新しい日を刻む。その五十日後「青嵐」の時季、われらに「赤嵐」の息が一人一人の上に注がれ信仰・希望・愛の源泉が与えられる。

ところで今日は何の日?。神の恵みに応える日。主に感謝。

